

## 第18回陸側遮水壁タスクフォース議事概要

日時：平成28年5月10日（火）15：00～17：15

場所：経済産業省本館11階 1111会議室

出席者：大西主査、西垣委員、伊藤委員、丸井委員、下戸委員、松尾委員、井尻委員、伊東委員、東京電力、鹿島建設、尾澤審議官、平井審議官、湯本室長、秦対策官、柿崎企画官、水野研究官、伊奈補佐

議事概要：

議題1. 陸側遮水壁の運用状況について、東京電力より説明。【資料1-1】

<主なコメント>

- 互層部・中流砂岩層の水位変化が凍結開始と連動していると考え理由は(P. 31)。  
→凍結運転開始後に、互層部の水頭が低下し中粒砂岩層の水位が上昇していることから、凍結運転開始に伴い凍結管の温度収縮が生じ、地盤と凍結管の間に水みちが生じたことによるものと考えている。
- サブドレン No. 1 の水位変動と地震の関係性如何 (P. 43)。  
→サブドレン No. 1 については、凍結開始前より周辺サブドレンやリチャージウェルと比べて水位が高い傾向にあり、この時点で互層部水頭の影響を受けていたことが推測される。その要因として、地震によりサブドレンの構造等が損傷を受け、元々互層部水頭の影響を受けていたところ、凍結開始によりその影響がより顕著に表れるようになった可能性がある。
- 海側の凍結を先行させることにより、ダムアップによる弊害が生じる懸念はないのか。  
→海側の効果が発現した結果、ダムアップにより地下水流入量や、サブドレンの地下水汲み上げ量が増加する可能性はあるが、これを抑制するためにも海側の効果発現後、速やかに山側の閉合を進める方針。原子力規制委員会にも汲み上げ量が増加する可能性については説明している。
- 温度低下が他よりも遅れている箇所について、原因の分析や対策の検討状況如何。  
→各箇所について、地質構造や構造物の有無等を分析しつつ、対策を検討中。
- 第一段階フェーズ2への移行判断に当たっては、サブドレンからの汲み上げ量も評価すべき (P. 34)。

→基本的には陸側遮水壁（海側）の内外水位差が優位に拡大していることを以て評価を行っていく方針。ただし、サブドレンによる汲み上げにより遮水壁内側の水位が上昇せず、内外水位差に顕著な変化が見られない場合には、サブドレンのくみ上げ量等も含め総合的に評価を行う予定。

●粘土層については、温度低下に伴い一時的に水分をはき出すが、その後に吸い込み始める性質をもつ。この点も互層部の水頭低下の要因として考えられるのではないか。（P. 31）。

→①の要因と断定しているわけではなく、様々な要因が複合的に生じている可能性もある。いまだ凍結の途上であるため、引き続きデータを収集しつつ検証を行っていく。

●1号機海水配管トレンチ内滞留水の性状如何。

→2～4号機トレンチと異なり建屋内に滞留する高濃度汚染水が流入したものであるため、相対的に低い濃度（P. 53）。

議題2. 1号機タービン建屋滞留水処理について、東京電力より報告。【資料2】

<主なコメント>

●滞留水処理の最終的な目標如何。

→汚染水のアウトリークリスクを低減するため、最終的には中長期ロードマップに記載する2020年の滞留水の処理完了を目指している。各号機の建屋の状況など、今の段階では見通せない部分もあるが、1号機タービン建屋での取組を試金石とした滞留水の除去や、滞留水の放射性物質濃度低減などの取組を複合的に検討・実施していく。

以上